

第八師団 暗号教育

岩手県 高橋 幸男

昭和十五年二月、雪の深い寒い朝のことである。私は車窓から体を乗り出して故郷を見送っていた。そして嵐のような歓呼の声も旗の波もいつしか遠くへ消えてしまったが、その旗の間にじいっと涙をたたえて見送っている叔父の顔、そして無数の親しい友人の顔が次々と目まぐるしく浮かんできた。

その顔の一つが病床にあった母の顔になった。私は頬を掠める寒風の中で「お母さん」と大声で呼んだ。すると熱い涙が頬を伝わってきた。入営するにあたり、母の容態を気にかけてながらも、父や祖父に頼んで歓送会にも出席し、村の入営する者は黒沢尻町の割り当てられた旅館に一泊しなければ、時間までに入営出来ないというので、私は親戚の者と一緒にお茶屋旅館に一泊したのだ。そして翌朝出立の折、階段を二、三

段下りかけた時のことである。

女中から受け取った電報は私を呆然とさせ、忘れようとしても一生忘れることの出来ない「ハハタダシンダ、モンサク（母タダ死んだ、門作）」との知らせであった。母は未だ四十歳のはずである。門作は母の重態を案じ家に残り、父の手足となって働いてくれた親戚の一人である。

短い間にも、旅館では大勢の中から親類でも黒沢尻では顔のきく幾松爺さんが旅館の仏壇をかりて、私に仏壇の前で母の冥福を祈るようと、見送りに来て泊まった親類の方々と共に拝ませてくださいました。

私はあまりの驚きと悲しみに涙も出ず、唯々仏壇の前で母の冥福を祈るのに懸命に合掌した。幾松爺さんは、御文章を開き「白骨の御文さま」を声高らかに読まれていた。小さい時から聞き馴れた名文を朗々と、しかも和尚顔負けの動作で講じてくださった。私はありがたさに悲しみも薄れて不思議に気が落ち着き、幾松爺さんの御文さま「…六親眷族集まって嘆き悲しめども更にその甲斐あるべからず…」の文をしばらくは

脳裏から消すことが出来なかつた。このような悲しみのうちに入宮、出征された方はそう数は多くないと、今でも思うのである。

夢のような慌ただしき！ 時間に縛られた身の不由さから遂に一度も看病らしきことも出来ぬ親不孝者の息子であつたが、国に召される非常の時であれば母の霊もきつと許してくれることであろう。生まれてから二十年の長い間、よくぞ育ててくれました。

いつか母は「私のような者から、こうして立派に育つたお前を御国のために捧げることは、母は嬉しくて……」と涙を流し、遂にオイオイと声を立てて泣いてくださったことなどが思い出され、後から後からとこみ上げてくる涙で、はた目ではなんと女々しい奴と思つたことであらうと悔しくてならなかつた。私は、弘前に着く前、光を受けた雲空に、そそり立つ初めて見る岩木山、その神々しい山容に聖なる母の姿を感じながら、じつと掌を合わせた。

二月十日、寒い冬の日、弘前の歩兵第三十一連隊留

守隊に現役兵として入隊（同級生中甲種合格した者は三人だけ）したのが兵隊としての第一歩であつた。

我が岩崎村出身者は、村の兵事係小原重太郎氏の指示により集合し、小生の属する歩兵砲中隊の戸田伍長に引き渡された。

兵舎は満員で入れないので、当分の間は現在地に落ち着き、宿泊は西茂森町藤泉寺の大広間に布団を敷いて休むことになつた。教練は取り敢えず寺の空き地を踏み固めそこで行う。満州の本隊から初年兵受領者が来られ、私達の行先は北満州牡丹江省綏陽県綏西、第二七三部隊（歩兵第三十一連隊本部）高橋寿隊（歩兵砲大隊速射砲隊）とわかつた。

朝は引率で連隊に帰り「点呼」「満州での心得」「精神訓話」「教練」、昼は昼食後路上で教練、夕食後藤泉寺に帰り新しい布団を敷いて就寝の支度、夜は不寝番に二人で一時間交代で立ち、当番に当たつた時は本堂の裏に行き母の霊でも良いから会つてみたいの思いが巡つたが、それも空しく終わった。

やがて一週間はまたたく間に終わり連隊に帰り、兵

器、毛布を受領、渡満の支度、雨覆所に整理、初年兵受領に來られた班長に申し送られ、留守連隊長より訓示を受け、第一中隊要員を先頭に連隊の裏門より出発し弘前の駅に集合、軍用列車に乗車、窓は全部遮蔽。

「防護上軍の移動は秘密なり」と後に班長から教わった。やがて、一車毎に降ろされ、明朝新潟港出港のため、民家に一泊した。戦地に行く兵隊さんということで、えらく親切にされ申し訳ないくらいであった。

翌日は、新潟港まで送られお別れをした。輸送船は凄く大きいがぼろ船であると思った。寒い時期なので「足元には注意せよ」との命令があった。船倉には野砲隊で、馬も乗船したという。

やがて玄界灘にさしかかった時は思いもよらぬ大揺れで飯上げに行ける兵隊もなくなった。私も我慢に我慢をして、二、三人誘って受領に行つて来たが、食べる勇氣もなくなり横になった。その時「北上市和賀町」山口の幸男君いるか、山口の幸男君いるか！」と二人肩を組み、あごひもをかけて我が船室に上がつて來た者がいた。よく見ると下の馬部隊（野砲隊）から

上がつて來た野砲隊要員で、來たのは横川目駅前アラヤ店の辨治君と下村の総君である。「ここだ！」と立ち上がり抱き合つて喜んだのもあの時ならでの思い出であった。

その後、辨治君は名譽の戦死、総君は胸膜炎で内地に患送されたのも宿命とあきらめる出来事であった。

やがて輸送船は、朝鮮の羅津に着いたと言う。しかし、そのまま防護上船に二泊。下船したのは寒々とした敵しい焼山の如き坊主山で、民家も見えない所に駅があり、売店に煙草もある。珍しいので「みどり」という煙草を買った。

ここで専用列車に乗り換えるが外も見られない。平地を走ること六日間、着いた所は小綏芬（綏西）で、下車の命令が下る。満天の星空、広々とした台地に林立する兵舎！兵舎！兵舎！電気が煌々と輝き大都会にでも來たように思えた。歩くこと約二十分ぐらい。私共初年兵の入隊先は、歩兵砲中隊（高橋寿隊）だった。

兵舎に着く頃には兵舎の表の電灯は消えており、雪

の明かりで兵舎に入った。兵器その他を所定の場所に納め、身軽になって班内の大きなテーブルに座る。兵器も手箱も上履きも総べて先輩（戦友）の心尽くして私達個人個人の名前までが書かれていた。

先輩古兵の指図により夕食となる。赤い飯なので入隊祝いの赤飯か？と思えば、高粱飯であるという。

「後片付けはしないで、今日は遅いからすぐ休め」と言われ、すぐ休んだがなかなか眠れない……。先輩達が「明日から大変だぞ！」と言う。何のことだろうと思っているうちに寝込んでしまった。

翌朝は起床ラップで飛び起きる。気合がかかることおびたらしい。今日からは、現役初年兵（昭和十四年徴集兵）一人前の兵隊になるため、銃の操作から速射砲（戦車砲）の操作まで、一期の検閲（六カ月）が済むまでである。教える者と、教わる者もそれぞれ懸命に頑張った。全初年兵とも、それまでは皆同じような教育なのであるが、第八師団長の検閲が済み、一人前の兵隊になってからは、それぞれの教育があり、任務があり、それぞれの苦しみがあった。

私の任務、暗号について述べる。当然、一般では知り得なかったことなどの、事件について申し上げることにしたい。

第八師団司令部では、各連隊に対し、戦場の拡大に伴い「乱数式暗号」の緊急性を思考し、今まで暗号については、取り扱いはすべて将校以上と決まっていたが、それを大本営参謀部の原久参謀（四十一期）は、暗号作業を将校ばかりでなく優秀なる下士官及び兵より選び、つくってやらせてみようということをした。

昭和十五年、第八師団参謀部においては第一回暗号教育を七月より向こう十二月までの六カ月と決めて行うので、将校・下士官及び兵の優秀なる者を選抜して送るようにと各連隊に要請があった。

我が歩兵第三十一連隊本部においては、新しく将校一人、下士官一人、初年兵七人をそれぞれ中隊に対して要請された。

その要員は、連隊本部要員より将校一人、下士官一人、一中隊、三中隊、五中隊、八中隊、十一中隊、連隊中隊、速射砲中隊より各々一人宛、計九人というこ

とで、その命令の主文は次の簡単なものであった。

命 令

陸軍二等兵 高橋 幸男

右の者特殊教育の為 第八師団通信隊に起居を命ずる
期間 昭和十五年七月一日より同年十二月三十一日迄

昭和十五年 月 日

歩兵第三十一連隊速射砲中隊

中隊長

このようにして、連隊本部陸軍少尉佐藤正孝、同陸軍伍長及川春男、各中隊より陸軍二等兵七人が転属を命ぜられたのである。

命令の出た翌日、私の班長、田面山軍曹殿から呼び出され、中隊長殿に次の如く申告したのであるが緊張の連続であった。

「申告致します！ 陸軍二等兵高橋幸男、この度特殊教育のため、師団通信隊に起居を命ぜられました。ここに謹んで申告いたします」。中隊長は「高橋！

お前は中隊の中から選ばれて行くのだから、よその中隊の者に負けないように、体を大切に頑張って来い、わかったな」と励ましてくれた。

それから二日後、班長殿より夜の点呼後呼び出された。「高橋！ お前、よいよ明日九時までに行くことになったぞ！ 持ち物を調べて連隊本部のトラックに頼み、本部の及川班長の指示に従え」と言われた。私は、班長殿にお世話になったお礼を述べたが、思えば入営以来はや六カ月、母の亡くなったことも忘れがちに一生懸命務めたが、また初めからやり直しか、と思えば心細かった。

命令の中にも、隊長の励ましの言葉の中にも「暗号教育」とは一言も言われていない。「特殊教育のため通信隊に起居を命ずる」のみであった。暗号教育、特殊教育とは何であるのか、あれやこれやと考えて朝早く目が覚めた。

連隊長への申告は、佐藤少尉殿に連れられてであった。小林連隊長は「ご苦労！ この度お前達は連隊の中から選ばれて、この教育を受けることとなった。何

の兵科でも大切でないものはないッ……。だが！お前達の仕事はまた特別の任務だから防諜には特に注意して一生懸命やって来い。初年兵とは言え、勉強によつては我が連隊にとつて「金の卵」になる身だからな！体には一層気をつけて励んでくれ！終わり」と申された。

我々は初めて会う者ばかりで、佐藤少尉殿が先に名乗り、及川伍長殿が次に、各隊の二等兵の自己紹介を終わりトラックに便乗して緩西の我が歩兵第三十一連隊の営門を後にした。我が部隊から師団司令部の緩陽までは山を越え六キロもある。さすがに連隊の営門を出る時は心臓が痛い程に苦しい思いをしたのは、私ばかりではなかったであろう。

第八師団の三個連隊から集まった人達は、私共を入境僅か二十一人だけであった。講堂に集まり教官の来るのを待った。間もなく真新しい参謀肩章をつけた吉田参謀が来られた。私達は参謀肩章を見るのが初めてで皆緊張していた。礼を受けられた吉田参謀は、ニコしながら皆を座らせ、自ら名乗りをあげられた。

我が連隊も佐藤少尉殿から名乗りをあげられ九人が申告をした。

吉田参謀からは暗号とは、暗号の必要性・重要性・機密性、暗号種類等々、また暗号手の任務の重さを自覚し、防諜には特に注意を払うよう注意があった。そして一人の暗号手の間違いから思いもかけない大事件になった過去の例を述べ、民間の笑い話、電報にもこんな例があることを話された。

「アメハイゼントシテフル」

・雨沛然として降る　・雨は依然として降る

「カネオクレタノム」

・金送れ頼む　・金をくれた飲む

そして参謀の話は続く。面白い話、失敗した話、命をかけて守らなければならない暗号手の覚悟等で午前中の話は終わる。注意としては、第二日目からは朝九時開始、午後四時まで勤務をして、食事当番と講堂の掃除だけ、不寝番は免除。勉強中は上下の隔てなし。午後は環境の整理をせよと第一日目は終わった。日程は次の通りであった。

・数字の練習。上手に書けるよう、間違い易い数字、1と7、7と9、6と0、来る日も来る日も数字の練習ばかり。

・転写の練習。乱数表の数字を枠の中に三数字ずつ書く、これを転写という。これを一週間ぐらい。

・加え算。作業用紙に乱数表の上の欄に(三数字)をその下に別の欄数字を並べそれに加え算、拾単位は考えずに、6と5は1、7と8は5というように睨んだだけで答えが書けるよう、手が一人でも動くまで、これも一週間。

・減算。1から9を引いて2、2から8を引いて4、1から6を引いて5、これも睨んだだけで書けるまで。

最後に乱数表の頁と座表を指示し、転写して計算中に「やめえ……」で提出させる。

いよいよ次回は暗号書類を渡されるといふ。なんとなく胸がわくわくしてきたのは私一人ではなさそう。もう一カ月になる。

いよいよ今日は暗号書類配布の日。いつものように吉田班長(参謀)が来られ次の話をされた。

暗号とは「軍事機密」「作戦命令」「人事秘密」、その他「極秘」または「秘密」「丸秘」等、急を要する案件を暗号に組み立て、モールス(無線)、電話(有線)、伝令(人間または鳩)等に託して速やかに相手方に伝達するものと言う。従って年月日、時刻、場所、発信者及び宛名等は明確で、原文は簡潔にして明瞭でなければならぬ等話され、各部隊の将校に渡され、個人に交付された。

・暗号書

新聞紙半頁大を二つ折りにして裏表上質の紙、三数字を以て一語となり、数字、カタカナ、ひらがな、符号等は一文字が三数字のため、不便に感ずるが、軍用文の一語が三数字になっているため便利なり。

・乱数表

三文字が一枠で、数字一枠に一〇枠、縦が一〇枠、〇頁より九頁とす。

その他、無限乱数表、換言表、地名事典、秘匿乱

数、組立て、鍵数字、大天地、翻訳、判読、解説、軍用電報用紙、浄書用紙

などについての教育があった。

このようにして、二カ月足らずで、暗号修業教育も終わりになろうとした時、吉田教官から「今日は、ちょっと難しい問題を出すことにした。鍵の違いか？乱数の違いか？通信手のモールの違いか？それともモールのくずれか？実例をあげて出したものだ。これらをゆっくり考えて解くように！出来た者は間違いないか、よく調べて俺のところへ持ってこい！これが出来た者は、いくら早くとも一日休みを与える。内務班に帰って好きなことをしてもよろしい……」と述べられた。

私は三問題解くことが出来浄書していると、吉田教官（参謀）は「よろしい、良くやった。内務班に帰って好きなことをやっていいぞ、約束だからな」と、さも嬉しそうに言ってくれた。私は有頂天になり、床にゴロリと仰向けになり「陣中倶楽部」を見始めた時、通信隊の週番士官に見付かってしまった。週番士官

は、許可をした吉田班長を暗号の教育班長吉田参謀と知らず、下士官の班長と思い、「案内せい」と言われ講堂に案内した。参謀は「具合が悪いというから少し休んで来いと俺が許したんだ」と言ってくれたので思わずホーッと胸をなで下ろした。週番士官が帰ってから「高橋！床はだめだ、とくに休み以外の床はな、ハハハハ」と大きく笑ってくださいました。

この吉田参謀の、週番士官にも、私にも傷を付けないうで諭された温情に対し、現在に至るも感謝していい。参謀という高い所にいる、我々二等兵など眼中にない、いわゆる偉い人であると思っていたのに、と、今日に至るも忘れられず、教育者としての吉田参謀にお会いしたく捜しているのである。

暗号手……。このことだけは、私達一生の思い出として忘れようとしても忘れられない。防諜上、他に漏らしてはならないということを吉田教官から堅く言い聞かされ、自他共に誓って今日まで沈黙を守って来た私達暗号手ではなかったらうか。

しかし、あれから五十余年……。特に当時大本営において縁の下の力持ちになっておられ、暗号にかかわる陸軍のお偉い方々さえも小出しに暗号の話をされてきたことである。『暗号を盗んだ男たち』など人物について、『日本陸軍暗号史』『日本陸軍の暗号秘話』『絶対解読されなかった日本陸軍の暗号』などの著書がある。

戦時中、暗号関係者は常に縁の下の力持ちであった。また、決して表面に現れることがない。特に「俺はかつて暗号手だった」などと名乗ることは、兵や下士官においてもまた然りである。

終戦の時もそうであった。終戦と同時に戦友たちはわれ先にと郷里に帰ってしまった。だが、あの時、不安と焦慮にかられながら暗号書類を焼き捨てるまではとの責任感にかられた。あの時、戦友よりも二日遅れて帰ったのも暗号手という責任感からではなかったろうかと今でも思い出す。

暗号書は全く変更なしであったにもかかわらず、乱数表は毎日変わるといって程大事なことであった。特に

毎日使用する暗号用紙に「無限乱数」を自分達で作成し書き入れておき、同じ用紙を暗号手双方で持ち歩き使用したこと、使用済みの用紙は直ちに焼き捨てたことである。

部隊で一番早く上級者（師団長、連隊長）から命令。指示のわかる者は暗号班長（参謀）並びに連隊にあっては連隊副官であり、そして翻訳（組み立ても同様）暗号手自身であることを忘れてならない。内容の如何にかかわらず、深夜でも受信後直ちに師団長及び連隊長に報告せよと命令されていたし、我々暗号手は暗号班長（参謀）、連隊にあっては連隊副官に速やかに報告したものである。

そうした中でも忘れられない大事件があった。満州、牡丹江省綏西の我が歩兵第三十一連隊が独自で行った、第二回短期特別養成教育も終わろうとする昭和十七年四月末頃である。乱数表の紛失事件。妬みによる事件であったが、人間の弱さがなせる業とは申せ残念な経過で、残念な結果を生んだことを後に知った。

本人は軍法会議に回され禁固六カ月、上司も責任上重

謹慎二日、減俸（一カ月給料半額）、兵は七日間の重
営倉であった。しかし、公用行李の鍵保管の曹長、暗
号手は不問に付された。

暗号解読の恐ろしさは、今次の大戦においても、外
務省より駐米大使宛の電文は解読されていて、日本の
手の内は米国に筒抜けであったことでもわかる。ま
た、連合艦隊司令長官山本五十六大將機の南方での撃
墜事件も、海軍の暗号が解読されたことが一因という
ことを戦後聞いた。暗号兵として陸軍にあった私とし
ても、暗号書の大切さを今更ながら思い知らされ、そ
の重要な任務にあったことを秘かに誇りと思ってい
る。

終戦を知らず北満で戦った

第百七師団歩兵第百七十七連隊

岩手県 小林 謙 一

もう既に五十数年も前のことである。狼の遠吠えす
る満州の広野に、あるいはソ連チタ地区チェノスカヤ
の地に、無念の死を遂げて屍は文字通り草むしている
戦友の御冥福をお祈りすると同時に、当時の悲劇を記
憶をたどってお話をしたい。

私は昭和二十年二月十日、青森県弘前の北部第十六
部隊に現役兵として入隊した。同級生三人は共に入隊
したのだが、うち二人は戦死してしまった。

二月の弘前は岩手県より寒さが厳しく、雪も多い。
起床と同時に舎外で点呼。当時は兵舎の窓まで積雪が
あり、全員での雪踏みが一週間の日課であった。真新
しい軍服を着用して気分は軍人であると自覚をし、一